

続・科学の社会主義研究

不破哲三著

新日本出版社

続・科学の社会主義研究

不破哲三（ふわ てつぞう）

1930年生まれ

日本共産党中央委員会書記局長

主な著書「マルクス主義と現代イデオロギー」（共著）

「現代政治と科学的社会主義」

「人民的議会主義」

「不破哲三著作集」

「新しい半世紀への前進」

「自由と民主主義の旗」

「科学的社会主義研究」

「進歩と変革の大道を」

「青年と語る」

統・科学的社会主義研究

1979年5月20日 初 版

定価 1000円

著 者 不 破 哲 三

発 行 者 松 宮 龍 起

郵便番号 151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-11-8

発 行 所 株式会社 新日本出版社

電話 東京 (478) 3 3 1 1

振替番号 東京 3-13681

印刷 光陽印刷 製本 古賀製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

続・科学の社会主義研究

目

次

科学的社會主義か「多元主義」か……………9

——田口理論の批判的研究——

序論 田口理論の出発点……………11

一 「民主集中制」論争への介入として……………11

二 前衛党論の逆立ちした発想……………18

第一部 田口氏の新構想の行方……………25

——党と社會主義のリベラル化——

一 “多元的社會主義”とはなにか……………25

田口氏の社會主義ビジョン／その三つの問題点

二 政党と國家との無原則的な混同……………40

「公明新聞」との奇妙な一致／バクーニン主義の現代版／スター

リン問題をめぐって／レーニンの党組織論とその歴史

三 前衛党の“多元主義”的再編……………74

「新しい型の党」という田口ビジョン／議會政治の論理の党内への導入／分派禁止の規定をめぐって

第二部 田口理論の源泉と支柱	98
----------------------	----

一 マルクス主義理解の貧困	98
---------------------	----

田口氏は、マルクス、エンゲルスをどう読んだか／第一インタナ
ショナルと労働者党／「権力分立」原理の合理化論

二 西ヨーロッパ崇拜の事大主義	123
-----------------------	-----

「先進国革命」路線の形成史／前衛党論の田口式「解釈学」

三 近代政治学への転進	146
-------------------	-----

非マルクス主義理論への二つの態度／近代政治学を前衛党論の根
幹に／「真理」と「政治」との対立の論理

結びにかえて	168
--------------	-----

レーニンの「執権」論について	175
----------------------	-----

「生産手段の社会化」について	
----------------------	--

日本共産党の路線と展望	193
-------------------	-----

から二十年 (200) 民主主義革命論の先見性 (202) 多数者革命と主
 権在民の原則 (207) 世界の最前線にたつ機関紙中心の党活動 (213)
 日本型社会主義の理論的、実践的な探求 (218) 自主独立の立場に立っ
 た世界情勢の分析 (221) ニクソン訪中と“三つの世界”論 (226)
 歴史の試練に耐えた路線を堅持して、国民とともに日本の未来を切り開こ
 う (231)

マルクスの社会発展史論とアジア的生産様式……………235

一 問題の所在……………237

二 原始共同体社会の発見……………241

一八四九年の社会発展史論／マルクスの理論的發展とマウラー

三 インド共同体から世界的仮説へ……………254

インドで発見したアジア的共同体／『経済学批判要綱』の分析

四 『資本論』と『反デューリング論』……………269

『資本論』とその草稿／マウラー以後——『反デューリング論』

五	マルクスの最後の研究	282
---	------------	-----

あとがき	291
------	-----

科学的社会主義か「多元主義」か

——田口理論の批判的研究——

序論 田口理論の出发点

一 「民主集中制」論争への介入として

昨年（一九七七年）十月の日本共産党第十四回大会の決定は、大衆的前衛党の建設にあたって、民主集中制の組織原則を今日の日本の階級闘争の諸条件にふさわしい形態で徹底する問題を特別に重視するとともに、反動勢力が民主集中制を反共攻撃の重要な対象の一つとしているもとで、発達した資本主義国での革命という特殊性を理由に、民主集中制の否認やその弱化を求める日和見主義の議論が論壇の一部にあらわれていることを指摘し、その危険な傾向の克服に、全党の注意をうながした。

「現在の情勢のもとでの大衆的前衛党の建設にあたっては、とくに民主集中制の徹底の問題を重視しなければならない。党员と党組織の積極性、創意性を高め、党内の豊かな意見と経験を党の方針、政策、活動に積極的に反映させる党内民主主義と、全党が全国的な方針にもとづいて団結し、強力な実践力を発揮することを保障する中央集権制との正しい統一——この民主集中制と

それは、派閥や分派の弊害とは無縁な統一政党としての、わが党のすぐれた特質であり、党があらゆる曲折を通じてわが国の革命運動で先進的役割を果たしうる組織上の保障である。わが党は、党建設においても、今日の日本にふさわしい、大衆の前衛党建設の組織路線を創造的に探究してきたが、民主集中制の思想と規律は、現在の日本のような発達した資本主義国における革命運動の勝利のためにも、欠くことのできないものであり、民主集中制を弱めたり否定したりする組織上の日和見主義は、結局は前衛党の解体に導く危険な理論である」(『日本共産党第十四回大会決議』——第三章 党建設の諸任務、『前衛』臨時増刊五八〇九ページ)

「最近、論壇での一部の議論に、発達した資本主義国での革命という特殊性を理由に、前衛党における民主集中制の規律の必要を否認したりその弱化を求めたりする議論が、一つの傾向としてあらわれていますが、それは、発達した資本主義国における階級闘争や民族闘争が独自のきびしさや複雑さをもつことをみずに、前衛党を弱体化させる解党主義的傾向を合理化する議論に帰着するものであることを指摘しなければなりません」(『第十四回党大会にたいする中央委員会報告』、『前衛』臨時増刊一二六ページ)

こうした傾向に属する議論の一つに、田口富久治氏の「前衛党組織論」あるいは「先進国革命論」がある。

この問題での田口氏の理論展開は、一つの歴史をもっている。最初の発言は、雑誌『世界』の一九七六年七月号に発表した「先進国革命とその国家体制」および同年七月一日付の「朝日新聞」夕

刊文化欄に掲載された「現代政治における政党の問題」で、それぞれ、現代革命や現代政治を論じながら、「共産党の組織のあり方」にその焦点をあてて問題にしたのが特徴だった。ついで、『現代思想』第二九号（一九七七年九月）に発表した「先進国革命と前衛党組織論——『民主集中制』の組織原則を中心に」では、民主集中制そのものを主題として共産党の組織論が詳論される。そして、一九七八年三月には、上記の『世界』や『現代と思想』の二論文を一つの軸として、論集『先進国革命と多元的社會主義』（大月書店刊）が発行されるが、その第一部として「先進国革命論の展開」（一、先進国革命路線の形成と発展、二、先進国革命論の現状認識と戦略、三、先進国革命の未来像）が新たに書きおろされ、「前衛党組織論」の前提となっている田口氏の「先進国革命論」や「多元的社會主義論」が、より全面的に展開されることになる。こうして、田口理論は、革命論、社會主義論、前衛党論を包括する、一つの理論体系をなすにいたったのである。

田口富久治氏は、その著書に『マルクス主義政治理論の基本問題』（一九七一年、青木書店刊）があり、最近でも『講座 史的唯物論と現代』（一九七七年、青木書店刊）の編集委員の一人となっていることにもみられるように、マルクス主義と科学的社會主義の立場にたつことを自認する政治学者である。そういう政治学者が、現代の主要問題の一つである発達した資本主義国での革命の問題、そこでの社會主義的未來の問題を理論研究の対象とし、さらにはその革命の重要な主體的條件をなす前衛党の問題について理論的な研究をおこなうことには、なにも奇異なことはないが、注目しなければならないことは、田口氏の研究が、残念ながら、氏自身の主觀的意図がどうあれ、科学

的社会主义とその事業を擁護し正しく発展させる立場からの前衛党研究ではなく、経過的にみても反動反共勢力の日本共産党攻撃に触発されたものであり、内容的にもそれに誘引された研究となっていることである。

こうした経過は、前衛党論をとりあげる田口氏自身の問題意識にも、具体的に反映している。たとえば、最初の発言の一つである「現代政治における政党の問題」(『朝日新聞』一九七六年七月一日付夕刊)で、田口氏は、この問題をめぐる状況をつぎのように説明している。

「共産党のような政党が『民主集中制』という組織原則をとっている限り、その独裁的傾向はなくならないという批判と、いやこの原則こそ近代的組織政党一般にあてはまるという反論との間で論争がおこなわれているが、私見によれば、問題は、この組織原則にあるというより、その実際の中身、実際の運用にこそある」

田口氏がここであげている、共産党の民主集中制をめぐる「論争」とはなにか。それが、日本共産党と国民とのきりはなしをねらって、反共勢力が作作的に展開してきた反共キャンペーンの重要な一部をなしていたことは、まだ記憶に新しいところである。当時、民主集中制の問題を、反共攻撃の題材として最初にとりあげたのは、立花隆の「日本共産党の研究」だった。立花は、『文芸春秋』一九七六年一月号に掲載した「日本共産党の研究」の第一回で、「暴力革命とプロレタリア独裁と民主集中制の組織とは三位一体」であり、民主集中制は「暴力革命とプロレタリア独裁」という、「その二つを遂行するための組織原則」であるとしたうえで、日本共産党が民主集中制の組織